

近世前期の失人と村

赤井孝史

はじめに

失人、即ち居村の耕地を捨てて逃亡する百姓は、走百姓とも称され、中世末から近世初期にかけてはとくに頻出する。佐々木潤之介氏は近世初期に失人、走百姓の発生する背景として、幕藩権力による小農自立と小農の土地緊縛の推進の過程において、小農生産力の未成熟と、年貢・夫役の過重な負担が失人や走百姓を生むとした^①。また、失せや走りといった行為は、対領主権力闘争においては逃散と対比され、深谷克己氏は逃散を「大百姓」層の闘争形態、走百姓を「小百姓」の闘争形態とし、石躍胤央氏は、自然発生的である限り両者は同じであるとした^②。これに対し木村礎氏は、「訴」という観点から両者を区分し、逃散とは領主に對し自らの要求^③、「訴」がいられない場合に、村ぐ

るみの規模で起こす集团的・組織的な逃亡を指し、それは要求貫徹のための手段であり、一方欠落や走りは個人・一家族、もしくは数家族による小規模な逃亡であって、その前提として「訴」が存在することはほとんどないとした^④。しかし、こうした失せ、走りの研究は、領主による法令や、領主側の記録などに依拠しており、それは一方では、失せ、走りに対する領主の対応から領主の存在理由、領主権力の相対化という研究の方向性を生んだが、失せ、走りの実態や、村落との関係、また、失人、走百姓と表裏の関係にある入百姓に関する検討などが欠けていた。これに對し宮崎克則氏は、走り者の実態及び村落に与えた影響を、細川領における走り者の村落への流入事例により検討し、無主地や開発地などが存在し、走り者を吸収できる村落の存在が、走り者を村から村へと移動させた、とする。同氏は、走りは、流民化ではなく、新天地を定めての移住であっ

近世前期の失人と村（赤井）

たとし、こうした走り者を受け入れた十七世紀初頭の村は開放的資格を持っており、十七世紀後半になると、小農経営の再生産が確立し、初期村方騒動を通して村政運営を自らの手に握り、領主支配が村に依拠した連帯責任による村請制が確立されると、閉鎖的な近世村落が確立するとし、その過程を「小農定着」の過程として捉えている。

但し、一村規模での失人と入百姓の關係の検討や地域的格差を越えて失人の問題を検討するには、まだまだ具体的事例の蓄積が必要である。本稿ではこのような関心に基づき、近世初期の畿内における失人と村の關係を検討することにする。一般に畿内は先進地域であるとされ、中世の惣村研究や移行期村落論も畿内の事例に依っている。そのような地域で失人が村にどのような影響を与えたかを探ってみることとする。

本稿でとりあげる近江国蒲生郡西宿村（現滋賀県近江八幡市西宿町）は、近世初頭に大量の失人を出した村である。なお、特に断らない限り史料は立教大学図書館蔵「西宿村文書」を用いる。

具体的な検討に先立ち、西宿村の地理環境及び近世の領主の変遷を述べることにする。西宿村は寛永石高帳では村高四八四石余、旧中山道沿いの宿である武佐宿に西接する。村名の由来もその地理的な条件による。

西宿村の村名が史料上に現れるのは、散見の限りでは慶長七年の矢部善七郎に対する徳川家康の宛行状である。それ以前の西宿村は、あるいは隣接する武佐村、長光寺村の一部であって、近世初期の検地で村切りされたのかも知れない。中世においては後の史料に佐久間信盛の所領であった、とあるものの確証を得ない。また近世には一貫して三給される相給村落である。慶長六年には松平定行、佐々木高和、矢部善七郎の三領主によって知行され、慶長末年頃松平領は旗本・野一色氏領に、佐々木領は延宝八年に佐々木氏断絶後、幕領を経て元禄十五年に泊太藩渡辺氏領に、矢部氏領は慶長十六年に旗本一尾氏領にそれぞれ変わる。

1. 西宿村の退転と慶長期の近江一國検地

（1）西宿村の退転

まず西宿村の退転が、いつ頃の時期に起こったのか、またその規模はどれほどのものであったのかを知る必要がある。残念ながら、退転に関する史料には恵まれているとは言えず、後代の史料と耕地に関する帳面類からの類推をもとに退転当時の西宿村の状況を探ることにする。

〈史料一a〉

乍恐書付を以申上候

表 1

領主変遷				
石高／年号	慶長 7 年	慶長 13 年	延宝 8 年	元禄 15 年
260	松平氏	野一色氏		
130	矢部氏	一尾氏		
86	佐々木氏	幕領・大津代官支配		渡辺氏

（註）「寛政重修諸家譜」、「寛永諸家系図」及び「西宿村文書」より作成。なお、石高は石以下を切り捨てた。

一、御検地以前、當村たいてんいたし、百姓五人残居申、荒地ニ而御座候處、私親參候而田地ひらかせ申候、右五人之内一人ハ殿様御分、式人ハ松平河内様御分、但今程ハ野一色頼母様御分、式人ハ矢部善七様御分、但今程ハ一尾伊織様御分ニ而御座候、其外之百姓方々より參候牢人・よりもの共ニ而御座候御事、

〈史料一 b〉

一、右御検地之時分、地下中ニ人数無御座候ニ付、さほ打柴二手三手ニ御打候由、就夫、ふたゑ打御座候而、高拾五石余不足、地なし御座候、何共百姓中途惑仕、達而私親御理り申候へ共、少余日御座候ニ付而、終ニ埒明不申、其後御三人様御代官衆へ御訴訟申上、何も御出被成、私親御供仕地請被成、色々御吟味被成候へ共、終出不申候ニ付而、其通ニ御定被成、割帳三つニそれゞニ御わり付ケ候而、大殿様御内下川道同様、松平河内様御内浅井茂右衛門殿、水ノ甚左右衛門殿、矢部善七様御内谷口平左衛門殿、同敷ノ御連判ニ而御割帳相極申御事、

（中略）

右之趣少も相違御座候、為其書付を以申上候、以上

兵左衛門

近世前期の失人と村（赤井）

寛文三年卯ノ四月十七日

佐々木様御内

頓宮五左衛門殿

長束瀬兵衛殿

〈史料一—a〉により、西宿村百姓らが退転した時期及びその規模、そして退転以後の動向が知れる。即ち西宿村は、(1)「検地」以前に退転し、(2)その際村には五人の百姓が残った。(3)この五人の他は「牢人」や「よりもの」である。(4)その後兵左衛門の「親」が西宿村に入村し荒れた田地を再開発した。

但し、史料が同時代の記述ではないため、抽象的な表現に留まっている。「検地」が何時の検地を指すのか、また兵左衛門の「親」は何者なのか、といった具体的な内容は記されていない。この点について次の史料を見てみよう。

〈史料二〉

西宿村之儀、百年余以前天正年中迄ハ、佐久間右右衛門佐殿知行所ニ而、殊之外高免に被召上、惣百姓年々之未進大分仕候付、大勢追放被仰付、又ハ自分と立のき候故、残百姓村中ニ六人ならてハ無御座、一村たいてん仕、田畑荒原野ニ罷成候、右六人之百姓と申候ハ、壹人ハ私先祖、貳人ハ野一色外記殿百姓、貳人ハ一尾伊織殿百姓、壹人ハ御料百姓三十郎先祖ニ而御座候、

佐久間右衛門殿跡慶長年中御検地被仰付、松平河内守殿・矢部善七殿・佐々木勝九郎殿右御三人様御知行に罷成候、然上ハ、百姓無人ニ而田畑荒申ニ付、御地頭御三人より西宿村之惣高不残兵七請持、田畑致開発、御年貢上納可仕候旨被仰付、即其節御地頭御三人様之役人衆追帳面御極被下候付、御請申上、其後方々より入百姓仕、下作為被申候、

〈史料二〉によれば西宿村の検地は「慶長年中」の検地である。これが〈史料一〉で述べるところの「御検地」と対応する。近江では慶長年間の検地としては、一国惣検地と呼ばれる慶長七年検地^⑥が行われる。西宿村もその例外ではない。「御検地」とは慶長七年検地のことであると考えるよからう。

また〈史料一—a〉で登場した兵左衛門「親」は兵七という人物であり、「西宿村之惣高不残請持」という形で荒れた田畑の再開発と年貢上納を請け負ったことが分かる。

ここで退転から兵七の登場までのプロセスを整理してみよう。西宿村では慶長七年検地以前に大規模な百姓の退転があった。その後慶長七年検地を経て、兵七の一人請けによる西宿村が発発する。つまり失人によって潰れ同然の西宿村は、兵七という存在と、慶長七年検地の実施を経て近世村落としてスタートする。まずは、この慶長七年検地に

ついて検討し、しかる後に兵七について検討する。

(2) 西宿村と近江一國検地

西宿村の慶長七年検地にはある問題があった。〈史料一—b〉によれば、竿入れの際には退転の影響で人がいなかったため、「ふたゑ打」つまり同じ土地を二重に計上してしまったということであろうか、十五石の不足分を出してしまった。西宿村ではこの不足・地無し＝無地高をどうにかして撤回しようとしてとめるが、果たせずに結局負担することになる。

さらに次の史料をみてみよう。

〈史料三〉

天正年中より慶長之始、佐久間右右衛門佐殿御知行之時、村たいてん仕、御検地之節も右之失人之名ヲ直ニ水帳ニ請申候、依之、三十郎持高も水帳之面大形失人之名請ニ而御座候、私持高も其通ニ而御座候、

〈史料三〉によれば検地帳の名請人には失人の名をそのまま検地帳登録人として記載した、ということである。つまり現状の耕地と名請人の関係を反映しない検地帳が作成されたことになる。

一筆毎の田畑と名請人が現実と乖離している以上、実際の年貢収取に用いることはできない。この検地帳で確認で

史苑（第五五卷一号）

きるのは西宿村内の耕地の確定である。つまり、最も基礎となる土地台帳の機能を持っていた。

そして現実の耕作関係や年貢収取に関する帳面として、〈史料一—b〉に見られる「割帳」が作成された。「割帳」の記載をから「割帳」作成当時の西宿村の状況を検討する。

〈史料四〉

一、兵七分

かきそへ
中田 三畝貳拾歩 五斗一升三合 市兵衛

馬さんまい
上田 七畝貳拾歩 壹石貳斗貳升六合 又三郎

同
中田 貳畝三步 貳斗九升四合 市兵衛

ノヤ
上田 五畝 八斗 太郎衛門

壹丁田
上田 一反貳畝四歩 壹石七斗貳升八合 市兵衛

ノヤ
上田 三畝貳拾歩 五斗九升七合 同人

(中略)

近世前期の失人と村（赤井）

式石五斗壺合

（中略）

合八拾六石三斗五升

慶長九年辰五月四日

この史料は「慶長九年佐々木領・割帳」の一部である。慶長九年の「割帳」は、この佐々木領のもののほか松平領のものが現存している。

「慶長九年佐々木領・割帳（以下「割帳」）」では、兵七、出作畠方分、荒分、割のこし分、宗兵衛分、又わりそへ分として項目だてのない分とに分かれてその項目内に検地帳一筆ごとに記されている。

この「割帳」で名請人として登場するのは兵七と宗兵衛の二人のみである。慶長九年の段階で、名請人がいなかった田地における出作率は約五三％で過半数以上を占めている。そして残り四七％は、西宿村内の人間で名請している事になる。

「割帳」の書式は、検地帳の記載である字名、田畑等級、名請人、そして新たに石盛を加えて現実の所有者「兵七」分として区分している。

以上の記載形式から、「割帳」の機能は、検地帳で確認された西宿村の耕地一筆一筆を、実態に則した名請と三領主のいずれに属する耕地かを明確にすることにあったと考

表2 慶長九年割帳

名 請	石 高
兵七	2.501
—	51.0355
出作畠方	7.139
荒	9.217
わりのこし	1.721
宗兵衛	12.646
又わりそへ	3.973
合計	88.2325

（註）単位；石。名請序列は割帳記載順によった。又、無項目の分は兵七の支配で、下作人等に宛作させる分であると考える。

えられる。

つまり慶長九年「割帳」は慶長七年検地帳を土台とした、実質的な村の耕地所有関係を明文化した最初の帳面であるといえる。

また注目されるのは、「割帳」に記される名寄で、宗兵衛と兵七の二人は慶長九年の割帳をみる限り、唯二人の名請人である。宗兵衛は「たいてん」以後に残った五人の百姓の内の一人と考えるのが自然である。つまり慶長九年段階では、この五人及び兵七の六人のみが西宿村の中で名請人になりうる可能性のある階層を形成している。

以上検地と割帳にみる慶長期の西宿村の状況を見てきた。慶長期の西宿村は慶長七年検地によって確定された、耕地と名請人―それは多くは失人であった―を機軸にし、慶長

九年の割帳作成によって、兵七及び西宿村に残留した五人の耕地を確認するという段階であるといえる。

(3) 一人請けと「極田」

次に西宿村と兵七との關係を検討しよう。先に兵七が西宿村の再開発の担い手として入村したこと、またその際兵七が西宿村の惣高を一人で請け持ったことを史料中から知ることができた。残念ながら兵七に関する史料に乏しいため、兵七が負った役儀を子の兵左衛門の例から検討することしよう。

〈史料五〉

一、先年百性^(マヤ)作申持地之物成、其下地之高ニ付四ツ武分ニ相極り其通ニ致候、御弁方古来より尔今所務仕候、然共、御公儀御免さかり申候へハ、其ノ相□ニ免引申候、又少あかり候而も右四ツ武分之外ハ所務不仕候、然と御公儀御免相より高ク御座候、其子細ハ、高不足其外、荒地夫米・井領池普請・御公儀御伝馬役・地下諸入用万端いにしへより尔今耄合耄タかけ不申、私耄人として出申候、としによりまとい参候共、古来より左様仕来候故、今以其通ニ仕候御事、この史料は〈史料一〉と同一のものである。既に述べたように、兵左衛門は兵七の子である。「兵左衛門」は高不

史苑 (第五五卷一号)

足や荒地の夫米・井領池普請・天馬役・地下諸入用等を一人で負担している。

このうち高不足については、慶長七年検地の際に村高の内十五石を地無つまり無地高を出している。この十五石の年貢負担のことを指しているのであろう。

では、兵左衛門(おそらく兵七もであろうが)はこれらの負担分をいかにして捻出していたのであろうか。次の史料を見てみよう。

〈史料六〉

口上

乍恐一書申上候

一、今度、當村御免相伊織様御分と相遠仕由、被為成御意迷惑仕、御両御代官衆へ種々御理り申上候得共、御承引無御座、弥々以致迷惑如此候、(中略)

一、小百性^(マヤ)前持地ハ、四ツ武分に取候へ共、極田之分おし合候へハ、四ツニも当可申候也、然は、殿様御物成と年ニより五分六分ちがい申由被為成御意候、其子細ハ、高拾五石余御三人様之内不足御座候、其まどい米・荒方・井水之修理・毎度之つり池之普請・夫米定使給・年ニより御傳馬役・諸入用少も百性かゝり不申故、五分六分ニ而ハたり不申迷惑仕候得共、先年より其通仕来申故、不及了簡仕候、御代官衆小

近世前期の失人と村（赤井）

百姓共ニ御尋被成、具ニ書付御取被成候間、委細不及申上候、然所ニ、伊織様諸々百姓さばき申、御免之通指上ケ申候、左様ニ無御座候ハハ、自今御免五つニ可被召置由、御意之旨御代官衆被仰付何共迷惑仕候、殿様御機嫌之砌宜御取成被仰上、如先年被仰付被下候ハハ、可辱偏ニ奉願存候、
恐惶謹言

九月五日

西宿村 兵左衛門

佐々木源兵衛様御内

佐久間七郎兵衛様

右指上ケ申候跡書之写

右の史料は年欠であるが、年貢免率四つ式分というところから寛文三年前後であると考えられる。この史料によると、「小百姓」にはその持地に対して四二％の免率で年貢を取り立てているが、「極田」の分と平均すると四〇％相当分になる。

このことは、「極田」の年貢が年貢免率よりも低いことを示している。しかも、年によつては、領主が定める免率と五／六分も差がでるというから、「極田」分の年貢負担額は必ず年貢免率よりも低額であつた。

年によつては五／六分もの差になる極田と年貢免率の差額は、不足高や荒地分、池普請、定使給分、傳馬役等が「少も百姓かゝり不申故、五分六分ニ而はたり不申迷惑仕候」とあることから、兵左衛門のもとに集積され、年貢以外の諸役負担のために用いられることがわかる。

〈史料七〉

一、右持地之外ハ、本百姓・寄百姓共ニ極め田仕、其ノ田つらつらニ相對いたし相極、百姓中古来より作申候、勿論そんとくニ百姓中かまい不申、相極候通納所仕候、上下御座候、

〈史料八〉

一、名寄高之分は定免四つ式分ニ斗申候御事、世なミ悪ク殿様より御免さがり申時、右定免之内江其位ニ免もらい申候、殿様御免あがりニ而も、定免四つ式分之上は少も出シ不申候、

一、名寄高之外之田地ハ、極田と申物ニ古来より仕来作申候、是ニハ高下御座候御事、（中略）右名寄高・きわめ田地と申ハ、私親より定来申候御事、

西宿村の耕地には名寄高、持地と極田の二種類がある。前掲史料で「百姓持高」とされていたのは、この史料によると「名寄高」であることがわかる。「極田」とは「名寄高」以外の田である、とするところも「持地之外」が「極

田」という文言に対応する。そして「極田」は、「私親」の頃から存在するものだという。

何故このような二種類の耕地が存在するのであろうか。

「極田」に関する記述そのものが不十分であるためその具体像は掴みにくい。が、おそらく退転と関係があるのであろう。つまり、耕作者が退転したことにより荒地となった耕地の存在低く設定された「極田」分と領主免率との差額は、それを耕作する「小百姓」ではなく、諸役負担のために兵左衛門が収取する。これは、退転以来の西宿村を支える形態であったと思われる。

2. 入百姓の受入とその存在形態

前節で検討したように十七世紀前半の西宿村は庄屋・兵七及びその係累による庄屋一人請けの状態にある。しかしながら、その庄屋一人請けの内容は、百姓が退転して庄屋を含めても耕作者が六人でしかない村の諸役を一人で負担する、というものであった。西宿村再開発を請け負った兵七は無地高・荒地等の諸役の負担するが、一方で、外部から入百姓を受け入れる。では入百姓達は、いかにして西宿村に入村したのだろうか。次に西宿村における入百姓の存在を追ってみよう。

(1) 指出帳、名寄帳に見る入百姓

西宿村に受け入れられた入百姓達は、いかなる存在のものであったのだろうか。寛永十一年の一尾領「西宿村御指出帳」には入百姓と頭書きがある四人の記載がある。〈表3〉〈表4〉はそれぞれ寛永十一年、寛永十三年の西宿村一尾氏領の持高表である。

〈表3〉に記載される入百姓与介、喜左衛門、余吉、又介の四人の持高に変化がないのは〈表4〉では与介のみで、他の三人は何れも増減がある。〈表4〉は、〈表3〉における入百姓田地を一筆ごとに抜き書き、「慶長十三年（一尾）淡路様分名寄帳」における名請人と比較したものである。例えば、喜左衛門が耕作する「字まとは」一・一七三石は、検地帳登録人が「介衛門」、慶長十三年名寄帳名請人が「正ちん」であることを示している。

喜左衛門分は「正ちん」跡及び上田村宗左衛門が耕作していた田地を受け継いだ形に見えるが、二年の間に請作する耕地に増減が見られることを考えると、「正ちん」跡を継いだとは言えまい。又介は「めうせい」が耕作していた田地の内の一筆と孫太郎の田地、「道明」の屋敷、そして慶長十三年には名寄帳に乗っていない「こささき」〇・一二九石を名請している。こちらは全く系統だっていない。以上のことから、入百姓は必ずしも特定の失人跡に跡百

表 3—1 寛永11年・一尾領

名 請 人	石 盛
孫十郎	15,525
彦三郎	7,299
三郎兵衛	4,874
理兵衛	9,207
入百姓・与介	2,497
入百姓・喜左衛門	3,453
入百姓・余吉	3,234
入百姓・又介	0,617
清春	0,785
兵左衛門	8,441
ほっけ堂	0,144
その他	52,0657
出作分	78,681
計	130,7467

表 3—2 寛永13年・一尾領

名請人	石 盛	名請人	石 盛
孫十郎	18,850	喜左衛門	1,655
三郎兵衛	4,874	与介	2,497
彦三郎	7,299	又十郎	1,380
理兵衛	8,233	与吉	1,472
三右衛門	0,500	与三	0,428
善兵衛	8,059	九郎左衛門	0,160
新六	4,196	又介	0,513
清伝	1,531	孫介	4,368
善知	1,328	清右衛門	1,480
ひこ二郎	0,725	ほっけ堂	0,257
新左衛門	0,603	兵左衛門	9,439
又七	4,166	助右衛門	3,2442
弥なこけ	0,264	又蔵うは	0,040
三十郎	1,046	太郎	1,835

（註）「寛永十一年 西宿村御指出帳」及び「寛永拾三年 御なよせ帳」より作成。

表 4 寛永13年当時における入百姓持地の慶長13年名請人との比較

寛永13年入百姓高				慶長13年名請人	
喜左衛門				正ちん 正ちん 宗左衛門 出作分上田村	
マトハ	上田	1,173	介衛門		
	屋敷	0,240	彦左衛門		
サンマイ	上畠	0,240	加年	与八 出作分長光寺 与八 道明 ※	
与介			九郎二郎		
大シャウクン	上畠	0,520	与八		
マトハ	上田	0,821	二郎兵衛		
	屋敷	0,26	二郎兵衛	めうせい 孫太郎 出作分長光寺 ※ 道明	
マトハ	上田	0,896	二郎兵衛		
又介			メウセイ		
南平	上畠	0,096	大カウ坊		
南平	上畠	0,144	又五郎	余吉 シケ 上田 1,472 又三郎 善吉	
コササキ	上畠	0,129	新左衛門		
	屋敷	0,144			

（註）「寛永拾三年 御なよせ帳」、「慶長拾三年 御蔵入分・淡路様御分名寄帳」より作成。

姓として入ったとは考えにくい。次の史料をみてみよう。

元禄五年当時に佐々木領内で「入百姓」であることが判明しているのは、半兵衛、与次兵衛、長助、作兵衛の四人である。

〈史料九〉^①

半兵衛ハ出生西宿村之近在友定村之者、与次兵衛・長助も近在之者、作兵衛ハ他国者ニ而、いつれも親元和寛永年中西宿村入百姓ニ而、私先祖相傳之田畑屋敷永宛極作に仕、尔今其通ニ而差置申候、尤先祖宛米極之外一錢一粒ニ而も受取不申、勿論夫役之外諸役掛物先祖至尔今一錢一粒も掛ケ不申候、

〈史料一〇〉^②

入百姓共ハ私先祖之者共取立之候由、其上作人無人ニ而田畑荒申ニ付、手前之勝手旁差置申候水吞ニ而御座候、殊ニ作兵衛・長助儀ハ、私親代私代近キ比迄、数年普代同前ニ召仕、別而与次兵衛儀ハ四五年以前私召仕候、

右の史料は前掲した元禄五年兵右衛門書上の一部である。これによると佐々木領の入百姓半兵衛、与次兵衛、長助、作兵衛の先祖は皆元和・寛永年間に入百姓してきたとされる。また作兵衛を除いては西宿村に近い友定村などの出身である。

史苑（第五五巻一号）

彼ら入百姓の耕地は兵右衛門「先祖相傳之田畑屋敷」を「永宛極作」で耕作している事がわかる。但し西宿村はその耕地すべてが兵七により一人請けの状態にある。この関係は〈史料6〉では、「水吞」と書かれ、且「譜代同前に召仕」と表現されている。

また、元禄四年の「宗旨改帳」を見ると半兵衛、与次兵衛、長助、作兵衛の四人は「無高」と表記されている。

入百姓はその権利を大きく制限される存在として史料中に現れる。庄屋一人請の下での入百姓は、庄屋によって「取立」られ、耕地に関しては宛作の形式をとっていることがわかる。一尾領の入百姓の耕作地が二年間で微妙に異なったのは、宛作地を耕作していたからだと考えられる。

（2）元禄期の田地割渡要求の展開

失人輩出以後の西宿村は、入百姓の受け入れによって村としての安定と秩序を構築していった。すでに慶長七年検地を境に退転せずに西宿村に残った五人の本百姓と年貢一人請けする兵七、入百姓という身分差があったことを検討した。ところが元禄四年になって、この関係は変化した。

〈史料一一〉

口上

一、西宿村之内高貳百五拾五石余、野一色外記様御知

近世前期の失人と村（赤井）

行所ニ而御座候、

右之高、慶長御検地以来九拾年ニ及、私先祖より私
迄三代^{さばき}嘯来申候、尤田畑之内、小百姓方江田畑御年
貢極地ニ仕作らせ、古来よりは迄作らせ来申候、然
処、今度右之高御割取被下候様ニと小百姓より外記
様へ御訴訟申上候由ニ而、委細御尋可被遊候条、罷
下候様ニと被仰下候以上

西宿村

兵右衛門

未（元禄四年）

六月

「小百姓」らは兵右衛門に対し、兵右衛門が「嘯^{さばき}」い
てきた耕地の「割取」を要求した。

結果を先取りすると、この訴訟は「小百姓」の勝利に
終わった。「小百姓」たちは自らの耕地を「割取」ことに
成功するのである。

〈史料一二〉

右之御田地、不残名主兵右衛門支配ニ仕来候之處、今
度御水帳写之面御穿鑿被遊候処ニ、耆人之持高ニ可仕
筋目難立ニ付而、古来之御百姓助右衛門・吉兵衛并、
後來之人百姓共ニ高反別相應ニ御割付被下有難奉存候、

尤御年貢諸役急度相勤可申候、如先条弥永代賣、又ハ
極地、又ハ惣領耆人之外江少も割あたへ申儀、堅停止
被 仰付奉畏候、若違背之者御座候ハハ早速可申上候、
此御田地わりニ付而、双方少も申分無御座候、為後證
差上ケ申奥書連判仍如件之、
右之書そへ之処吟味被加候由可申候

名主

兵右衛門^印

清助^印

組頭

助右衛門^印

源兵衛^印

同

吉兵衛^印

五兵衛^印

御百姓

長兵衛^印

久五郎^印

同

市助^印

安兵衛^印

同

九兵衛^印

五右衛門^印

同

弥兵衛^印

助三郎^印

同

傳兵衛^印

清三郎^印

伊庭武左衛門殿
前田太郎左衛門殿

〈史料一二〉は「高割渡」後に作成された「元禄五年外記録御分寄帳」の奥書である。但し連印している百姓名は本来一列に記載されているものを三列に直した。

この史料により、元禄五年に西宿村の耕地は兵右衛門の一人支配から「小百姓」らに割渡され、その結果これまでの訴えに対し領主野一色氏は「水帳写之面」を穿鑿した結果、「老人之持高ニ可仕難立」という見解を示し、「古来之百姓」である助右衛門と吉兵衛及び「後来之入百姓」ら十四名に対し「高反別相應」に田地の割り付けを行った。

〈史料一〉で鬭争主体であった「小百姓」は、〈史料一〇〉で田地を割渡されている「古来之百姓助右衛門・吉兵衛」と「後来之入百姓共」のことであることがわかる。

次にこの「高割渡」が、どのような手続きによって行われたかを見よう。高割渡の状況は、「田地割申節助右衛門惣百姓申口書」という史料によって知ることができる。以下順をおってみていこう。

野一色領の「高割渡」は正月十二日に中屋村庄屋三郎右衛門を立ち合いに行われる。しかし、同十九日には「先日田割候へ共帳面見不申割田分斗書出シ割被申此通ニ而ハ合点不申」という申し立てが小百姓側からなされる。二十四日には「帳面」を見た上で「清帳」を作成するが、その内容に対して、三之丞、十右衛門、弥兵衛、清助、傳

史苑（第五五卷一号）

兵衛、源兵衛、長兵衛、加兵衛らが異議を申し立てる。

〈史料一三〉

三之丞老人跡ニのこり申候ハ、私作り可申田三口、帳へ入不申候と申候故、此三口ハ、此方死ニ候へハ其通高へハ入不申候、十三日道庵参、田地御割候由、就夫、我等作り申三口ノ地御徐候由承候、何ニとも御入被下儀被成申存寄候儀、殊ニ壱口ハ此度御割出渡由ニ候、外之田ハと御加へ被遣儀ハ成間敷哉と可申候故、貴殿ハ不成由申候而、其通かてん不参候へハ、明日道庵ニ被参候様ニ可申と申渡ス、扨、廿五日昼時分道庵参、先日申候田弥除キ候由、あれハ極地ニ候間帳へ御入可給と被申候、拙者申候ハ、先日申通極地と申ハ其方先祖持来地、是ハ何年已前迄ハたれの地ニ而候か、拙者ニ而支配ニ成其方へあて申候と申候、（中略）

一、同廿五日、百姓八人三郎右衛門へ参申分口上

一、兵右衛門何と被申候共田地三口戻申事成不申候

三之丞

一、永々作り申田地殊親子合ニ五六ヶ所御座候、是

ヲ戻申事成不申候間左様ニ相取被下候へと断

十右衛門

一、私作り申田此度助右衛門へ渡被申候、戻申事成不申候左様相取

近世前期の失人と村（赤井）

候へと断

弥兵衛

一、同断

清助

一、同断

傳兵衛

殊ニ私參候地悪所ニ而御座候、

一、上所ヲ戻し悪所請取申事成不申候

源兵衛

一、悪所ニ而候間請取申事成不申候

長兵衛

一、同断

加兵衛

「道庵」のように「極地」つまりは、「其方先祖持来地」ではない耕地は割渡の対象にならなかった。「三口之地」は、兵右衛門「喩」の土地を宛作していたものであり、相伝の地ではないため「帳入」の対象に成らない、とされたのである。

また、「道庵」を除く八人は、何れも従来耕作していた田地を手放すことを拒み、また渡された土地が「悪所」であるとして強く反対している。

二十九日になると、「清帳」に異存のなかった助右衛門は自分の分の割渡しを望み、また新たに安兵衛が「清帳」に異議を申し立てるなど混乱を極める。そして晦日になって出された結論は以下の通りである。

〈史料一四〉

割申田地ノ内、戻申候分ハ直ニ渡し戻、不申候分ハ惣百姓へあて分ニいたし徳米当暮渡可申候、収悪所

と申田地ハ惣百姓之内へくし取いたし作候由、尤徳米惣百姓中へ配分いたし渡申様ニ仕、

田地割をした内、そのまま渡すことができる分は渡し、そうでない分は惣百姓に対し宛作分として作徳米を渡すこととする。また問題の悪所については「くし取」で耕作者を決め、作徳米は惣百姓中に配分することで一応決着する。野一色領での高割渡は、耕地の良悪や「道庵」のように、割渡しを要求した土地が宛作地であるためその対象にならないなど、いくつかの問題を含んでいた。次に、元禄五年の幕府領での動きを見てみよう。

〈史料一五〉

乍恐御訴訟申上候

御下江州蒲生郡佐々木庄内

訴訟人西宿村百姓共

一、西宿村之儀、惣高四百拾四石五斗八升之処八拾六石三斗五升ハ御前様御下ニ而御座候、田畑之儀ハ、惣百姓入組ニ作仕候、然処ニ百姓不残つふれ申候而、御公儀様御役等勤兼申候、此儀ハ庄や兵右衛門仕業ニ而御座候ニ付而御訴訟申上候事、（中略）兵右衛門、村之水帳ヲ取隠シ右相極候外ニ、地無地高又荒高畝遠等林ニ致、御年貢米高免ニはからせ取、二三ヶ年程ツツニハ大分未進有之様ニ申掛ケ、田地ヲ作らせ

申事不能成候として、百性代々之田畑ヲ取上ケ、又ハ

百性相果申時節、成人之子供無之者ハ田地取上ケ、

妻子乞食之躰ニ罷成、行衛不知失申者御座候、或ハ

村ニつふれ、尔今居申者も御座候、ケ様ニ年々押領

仕、百性之田畑ヲ取上ケ、我々支配ニ被仕候而、

御公儀様御役等ハ少も不被仕、剩兵右衛門家より出

候百性三人御座候へ共、是迄も役義ハ致させ不被申

候、其上切死丹御改ニも隱置、御帳面へも載不申、

漸々去年御前様ニ而壹人御帳面に入被申候、ケ様に

我尽千万成義共、乍憚何共合点不参、兎角我々とも

つふれ申段迷惑ニ奉存候御事、

一、市兵衛と名寄帳ニ御座候分、兵右衛門持高ニ而

御座候、其外ハ惣作取込田地ニ而御座候、則水帳に、

我々先祖之名請ケ帳ニ御座候、御吟味奉願候、元よ

り當村田地共売買ニハ毛頭不仕候、兵右衛門買取被

申候は、買手形可有之候へ共、左様之證據ハ□座有

間敷と奉存候、ケ様ニ田畑兵右衛門へ取込候而ハ、

残居申百性も村之立住も難成、何共迷惑ニ奉存、則

ケ条書一所ニ指上ケ御訴訟申上候御事、

右之趣毛頭偽不申上候、御慈悲ニ兵右衛門水帳ヲ出

被申候様ニ被為仰付御僉義之上ニ而、年々惣地取込

田畑返シ被申、我々共無恙村百性相続申様ニ被為成

被下候は難有可奉存候以上、

元禄五年申之八月三日

御下百性組頭

三重郎

百性

半兵衛

同

与次兵衛

同

長介

同

作兵衛

今井七郎兵衛様

この史料は幕領（旧佐々木氏領）における三重郎ら五

人による兵右衛

門不正を訴える訴状である。三重郎らの主張を整理すると

次のようになる。

1. 兵右衛門は「無地高」・「荒高」・「畝」などを

林として年貢を高免にして賦課し、年貢未進があるか

のように主張して田畑を取りあげている。

2. 兵右衛門は自分の家から出た三人の百姓に「役」を

務めさせず、又宗門帳にも載せていない。

3. 兵右衛門が取りあげた田畑は「惣作地」であり、兵

近世前期の失人と村（赤井）

右衛門の持高は「市兵衛」分のみである。よって兵右衛門に「水帳」を提出させ兵右衛門の不当な田畑取込みを詮議の上、その田畑の返還を要求する。

このような三重郎らの訴えに対して兵右衛門は次のように反論する。

〈史料一六〉

乍恐返答書差上申候

御代官所江州蒲生郡西宿村

兵右衛門

同

一、西宿村惣高四百八拾四石五斗九升之内、八拾六石三斗五升ハ御料分殿様御支配ニ而、田畑之儀は惣百姓入組ニ作仕候、然處、百姓不残つふれ御公儀様御役等勤兼申候、此儀は、私仕業ニ而御座候由、相手より書付差上申候、私仕業ニ而百姓つふれ申候と申上候段、聊合点不参候儀ニ（中略）其後、方々より入百姓仕下作為被申候、然處、四拾九年以前申年、伊織殿百姓式人ハ高別ニ割候而相渡候へ由申ニ付、右式人分高相渡申候、其後三拾年以前卯年、三十郎ノ分高割候而、自分嘸ニ仕度由申ニ付、是も高割候ニ而相渡申候、其後去未年外記殿百姓式人高請取自分嘸ニ仕度由申候故、是又相渡申候、慶長年中去未年

迄九拾年来私代々嘸来候高ニ而候へ共、右五人ハ水帳に名前御座候ニ付、勝手次才高割渡申候、勿論高わけ候節は其時々御地□（頭カ）御役人衆迫申達、田畑地所御吟味ヲ請相渡候、ケ様二段々高割渡候ハ元来私持高とてハ無御座候様ニ相心得候也、御檢地以後之入百姓共迄私先祖より宛作之田畑高割取可申之由、無謂、偽申□と相見申候（中略）

一、私水帳取隠、無地高又ハ荒高畝達等仕候、年貢高免ニ為斗取二三年程つツニ而大分未進有之候様ニ申縣ケ、田地取上ケ、押狽仕候由申上候、私水帳取かくし可申様無御座候、則水帳指出候、乍恐御吟味被可申（候カ）、三十郎へハ、三十年以前水帳を以田畑屋敷共地所其時々御地頭之役人衆へ御吟味被申候也、三十郎と私親立合高割渡申候、尤其砌三十郎持高之分水帳より写取申候、壹ケ年ニ而も若御下札之外御年貢一粒ニ而も多納候類、又ハ三十郎持高之内之無地高・荒高之まとひ一粒ニ而も懸ケ申候也、勿論畝達等仕候之儀、此段別て被逐御詮議被下候様に奉存候、尤御料分無地高式石七斗余御座候故、御免相高當と毛付當少し遠御座候へ共、三十郎ハ毎年高當リニ而御年貢上納致させ、私儀ハ毛付當ニ而上納仕、無地高之分私まとひニ仕、三十年以前高割渡以

来其通ニ仕来候、此段ハ年々免割帳并御年貢納帳ニ
委細有之事ニ御座候而被遊御僉儀可被下候、数年私
方より用捨仕置候ヘハ、却て不謂偽申上候ヘハ、向
後三十郎方ヘ毛付當ニ而免割仕、相渡可申と奉存候、
且又入百姓共之儀ハ、其身持高壹合も無御座、私田
地高之内極作ニ而差置候故、水帳之儀可申上子細無
御座候、又私二三之内ニは大分未進有之候様申
懸ケ、田畑取上ケ押領仕候由申上候、尤未進年々大
分仕候者ハ、御役人衆迄得御下知、宛作田地取はな
し申候、我尽押領と申儀ハ毛頭無御座候、

(中略)

一、市兵衛と名寄帳ニ御座候分、私持高ニ而、其外ハ
惣作取込ニ而御座候、則水帳に相手五人之者共名請
御座候、西宿村ハ田地売買毛頭ニ不仕候、私買取候
ハハ手形可有候由申上候、此段ハ右申上候通、三十
郎先祖ハ水帳ニ名請御座候故高割渡申候、殘四人之
入百姓共先祖之名請水帳ニ御座候ハハ、何時成共田
地相渡可申候、此者共水帳ニ先祖之名請無御座候事
ハ可被存、發頭人ニすゝめられ、跡かたもなき儀申
上候と相見申候、

一、西宿村之田畑私押領いたし候様ニ無筋偽申上候、
若私一畝ニ而も無謂田地所持仕候ハハ、慶長年中よ

史苑(第五五卷一號)

り以来九拾年余之間為持置差置可申とハ被奉存候、
此段乍恐御詮議奉願候、

右之段々少も偽不申上候、御慈悲ニ被為聞召分何分
ニも被為仰付被下候ハハ難有奉存候、以上

江州蒲生郡西宿村

兵右衛門印

上ル跡

元禄五申年八月

今井七郎兵衛様

史料が長文であるため内容を要約する。兵右衛門の主張
は次のように整理できよう。

1. 三十郎(三重郎。以下「三十郎」で統一する)には
三十年前に高を割渡してある。夫役の外諸役も一切掛
けていないのだから潰れたのは三十郎本人の責任だ。
2. 無地高・荒高・畝遠の負担は三十郎には掛けていな
い。すべて兵右衛門が負担している。無地高等の分を
林にして高免にし未進分を計上したというのは間違
である。尤も未進のある者は地頭に申し出た上で宛作
田地を取りあげている。但し、年貢免相が兵右衛門は
「高富」、三十郎は「毛付當」で計算している。(三十
郎の申し分は年貢賦課の対象の差だと思われるので)
これ以上三十郎が偽りを言わないように三十郎にも

近世前期の失人と村（赤井）

「毛付當り」で年貢を賦課する。

3. 入百姓は兵右衛門持高の内の田畑を宛作（極作）しているものであって、元来持高はない。水帳に入百姓達の先祖の名寄があれば高の割渡しをしてよいが、ないのだから割渡しはできない。

この相論では、年貢未進等で兵右衛門が集積した土地の返還を要求する本百姓Ⅱ三十郎と、宛作農民Ⅱ入百姓の田畑割渡し要求という二重構造をとっていることがわかる。

兵右衛門の主張から、三十郎は退転しなかった五人の百姓の内の一人の末裔である。したがって三十郎の先祖の名が水帳にあり、寛文三年の高割も水帳に則って行われた。

一方の兵右衛門は、三十郎の年貢未進に対して本物返などで割渡した土地の集積を行ったと考えられる。つまり三十郎は、兵七による一人請けく高割渡しく年貢未進による兵右衛門の集積という過程を経て潰れたことになる。

他方、入百姓達は「先祖之名請」がなく、宛作の田地を耕作する。宛作農民である入百姓達の高割渡し要求からは、一軒前の本百姓化を計る彼ら入百姓の姿が見て取れる。それは兵右衛門の庇護から脱し、同時に共同体成員として、西宿村に定着することを意味している。つまり元禄五年の高割渡しに関する争論は、兵右衛門の集積するところとなった自らの田地の請け返しを要求する三十郎と、兵右衛門の

経済的影響下から脱し、西宿村に定着する基盤を築こうとする入百姓達の連携^⑤によって成り立っている。

先に検討した野一色領の高割渡しについては、「去末年外記殿百姓式人高請取自分勝手仕度由申候故、是又相渡申候」とあるように、本百姓である「古来之御百姓」助右衛門・吉兵衛二人の高割渡しが元禄四年に行われたことに連動した、入百姓らの動きであった。

また野一色領の「田地割渡」における「道庵」が、相伝の地Ⅱ「極地」ではないという理由から宛作地の割渡しを拒絶されていることを想起してみよう。野一色領での高割渡しは「古来之百姓」、「入百姓」の区別なく割渡しの対象となっていた。

「道庵」が入百姓であると確認する術はないが、幕府領の「半兵衛」や「与次兵衛」は入百姓であることが史料中に記されており、宛作地しかもたないという理由で田地の割渡しを拒絶されている。以上から入百姓の中に、相伝の地Ⅱ極地を持つ者と兵右衛門からの宛作地しかもたぬ者の二種類の存在があることを想定させる。「道庵」が「元禄五年名寄帳」に連印していないところをみると、「道庵」の運動は失敗し、宛作地の割渡しは行われなかったと考えられる。残念ながら、幕府領の争論はその結果がわかるような史料を欠いているため、半兵衛らの運動がどのような

結末を迎えたか知る術がない。しかしながら、野一色領での事例をみる限り、割渡しには「先祖より持来」地という一定の法則性があつたことは確かである。

おわりに

以上で西宿村の事例の検討を終える。失人によって潰れ同然の村となつた西宿村が、他所からの移住者⇨入百姓の力によって再興するという事実は、失せ、退転を包摂する地域社会を容易に想像させる。そして移住⇨入百姓を受け入れる条件としては、荒地や原野も必要であらうが、西宿村における兵七のような存在も必要なのである。

兵七の出自については不明だが、西宿村を一人請けできるほどの経済力があつたことは事実である。⁽¹⁾そして彼の存在なくしては入百姓達もなかつた、といわざるをえない。個々に流入してくる入百姓達にとつて、西宿村が退転以後そのままの姿であつたなら、受け入れ先としては不適當な村であつたろう。西宿村、兵七、入百姓はそれぞれが機能しあつて巧みに連関していたのである。

十七世紀末になると、この三者の關係は変化するようになる。入百姓は西宿村の正規の構成員として村の一員となるべく運動を開始する。それは田地の割取りというかたち

で具現化する。西宿村の構成員となるには、まさに西宿村に住む⇨定着するということと、兵七（兵右衛門）の庇護から脱する⇨自立の両面を確立することに他ならない。この西宿村の事例が、近江や畿内において特異なものであるか否かは、さらなる事例の発掘をせねばならない。この点に関しては今後の課題としたい。⁽²⁾

註

- (1) 佐々木潤之介「幕藩権力の基礎構造」（御茶の水書房、一九六四年）
- (2) 深谷克己「幕藩制国家の成立と人民闘争——日本封建制研究の現代的課題に触れて——」（『歴史評論』二四一号）
- (3) 石躍胤央「阿波藩における走り百姓について」（『徳島大学教養部紀要』一九七一年）。同氏「土佐藩初期の『走り者』対策について」（『徳島大学学芸紀要』一二号、一九六二年）
- (4) 木村礎「逃散と訴」（『岩波講座 日本歴史』一〇 近世二、一九七五年）但し、逃散と走りの両者は関連性が強く、走り容易に逃散に転化しうるとする。なお、失せ、走り、退転、欠落など、百姓の逃亡を指す語はいくつかあるが、本稿では西宿村文書の史料上に現れる退転、失せという語を用いる。
- (5) 宮崎克則「近世初期の『走り者』と村落状況」（『歴史評論』四八八号・一九九〇年）。なおこのほかに失せ、走りに言及した論文に、川口恭子「近世初期の走百姓について」（『原田敏明教授退官記念論文集』、一九六〇年）、渡辺信夫氏「近世

近世前期の失人と村（赤井）

初期人返令の展開」（『日本文化研究所研究報告』別巻一五号、一九七八年）、同氏「秋田藩初期における欠落・逃散」（『半田教授退官記念事業会「秋田地方史論集」みしま書房、一九八一年）、半田隆夫「近世初期農民と移動」（『大分県地方史』一〇三号、一九八一年）がある。また、中世史の研究としては、黒田弘子「逃散・逃亡そして『居留』の自由」（『民衆史研究』三三三号、一九八七年）が逃散と欠落を区別する。また、藤木久志「大名領国の支配構造」（『日本経済史大系』中世）東京大学出版会（一九六五年）で、藤木氏は後北条領国における欠落の事例を検討し、欠落した農民は都市部に流入して商工業者のもとで隷属的地位を得るコースが支配的であったとする。また、欠落農民の還住を目的とした人返法と、人返法によって強化される戦国大名法については、同氏「戦国社会史論」（東京大学出版会、一九七四年）において、鎌倉幕府法以来堅持される「百姓」居留の自由が室町期には在地領主層を拘束する法として継承され、戦国期には「百姓」以下の農民逃亡が引き起こす在地領主内、領主相互間矛盾の深刻化とともに「百姓」緊縛は在地領主層の階級的課題となる、とし、ここに在地領主層が共同体制を形成し、連帯的相互性を特徴とする在地法圏が形成される、とする。また、近年戦国期における人返し令は、農民よりも武家奉公人を対象にしたものであったとする菊池浩幸「戦国期人返法の一性格」（『歴史評論』五二三号、一九九三年）がある。

(6) 慶長七年近江国検地については、滋賀県の各市町村史などがとりあげている。たとえば『八日市市史』第三巻 一〇二頁（一九八六年）、『山東市史』史料編 五〇二頁（一九八六

年）。しかし、これら市町村史は検地帳の分析のみに留まる。近江一国検地について論及したものに、藤田恒春「慶長七年近江国検地を廻って」（『ヒストリア』第一二九号、一九九一年）がある。藤田氏は、近江の慶長七年検地帳には分米記載があるものとなないものがあり、それは、天正十九年検地の成果を克服して畿内・西国を押さえ、豊臣領すら存在した近江に竿入れすることにより徳川領国化することを目的とし、そのために動員した豊臣系検地奉行の存在によって、分米記載の有無が分かれるが、記載方式の統一を欠いても近江国内の個々の地積と名請人把握とは貫徹しえた、とする。

(7) 西宿村の慶長七年検地帳は、本帳一冊、写し三冊が現存。

(8) 「西宿文書」・元禄五年「西宿村兵右衛門、乍恐返答書差上申候」また、史料の引用に際しては「ニ」・「而」・「江」など一部を除き助詞は平仮名に直し、欠損して判読できないものは□で表した。

(9) また、兵七が「市兵衛」という人物の跡に入ったことが「史料一五」、〈史料一六〉などからわかる。

(10) 寛文三年、介右衛門他四名による「口上書之写」の一部。

(11) 寛文三年、兵左衛門「乍恐書付を以申上候」の一部である。

(12) 〈史料一六〉と同一の史料の一部である。なお、争論の結果がわかる史料は現存しない。

(13) 同右

(14) 神谷智「近世中期における高請地把握と質地慣行の変化」（『日本史研究』三六二号・一九九二年）。神谷氏は近世初期から中期にかけて自立した小農を把握するために中期検地がおこなわれるとし、又「元禄期半ば以降増加してきた質地取

引きや代替りによる検地帳名請人と実際の所持者との齟齬」が始まるという。また、「イエ」観念と質地慣行」として高請け地を請け戻す権利の根拠として、その名請人の「イエ」を正當に相続している、「先祖」の相伝の地であること、を挙げている。

(15) 水本邦彦氏は「小百姓」文言に注目し、前期村方騒動を通して、一、初期本百姓、二、小高持、三、小高持・無高連繋の形態に分けられる、とし、歴史的にも、また論理的側面においても一〇三の序列で進行するとする。(同氏「近世の村社会と国家」東京大学出版会、一九八七年)

(16) 兵七のような存在は、近世初期の新田開発の研究においては、初期新田開発の主導的な役割を果たした、中世以来の土豪的な存在として位置づけられよう。しかしながら、武佐宿に隣接する西宿村の地理的条件を考えれば、宿の有徳人を想定した方がよいかもしれぬ。また「土豪」という概念で、彼らの存在を一元的に捉えることについても慎重を期すべきであると考ええる。兵七に類型を求められるような存在が、地域社会において如何なる役割を果たしていたのかを、さらなる事例発掘とその検討により明らかにしてゆく必要がある。なお、初期新田開発については、信濃国北佐久の四新田を分析した大石慎三郎「近世村落の構造と家制度」があり、大石氏自身も土豪という語を用いることを本意としているが、他に適当な言葉がない、とする。なお、大石氏のいう「土豪」とは「戦国末期から近世初頭にかけて、何等かの意味でスムーズな封建家臣団化の道を阻止され、家父長的奴隸制、またはそれに近い構造を持つに至った在地武士」であるとする。ま

た、宿の有徳人については、播磨国斑鳩庄の宿有徳人・円山氏について検討した、稲葉繼陽「中世後期の宿有徳人の存在形態」『史苑』第五二号、一九九一年）等がある。

(17) 畿内における失人と村の対応には「向日市史 史料編」に元和・寛永期の寺戸村近衛領において、総高二百九十五石の内、九十一石一斗九合が失人分であることが記されている。(元和八年 寺戸村近衛家領名寄帳) また、失人分を「あて(宛力)」とした年欠の名寄帳が存在する。西宿村文書においても言えることだが、失人や入百姓についての記述が帳簿類に記されることは必ずしも多くはない。なお宛作については、山城国川島村の革嶋家文書を分析した神田千里「宛米」『ことばの文化史中世3』平凡社、一九八七年がある。

付記：本稿は一九九三年度の立教大学博士前期課程修士論文を基に加筆、修正をおこなった。

(江東区文化財専門員)